まえがき 「承のものづくり」

Preface : Monozukuri of Development

岩見 健太郎

Kentaro IWAMI

- 2003 年東北大学工学部機械電子工学科卒業, 2008 年東北大学大学院工学研究科ナノメカニクス専攻博士後期課程修了, 博士 (工学)
- 主として行っている業務・研究
・ プラスモニクスを利用した MEMS/NEMS の研究
- 所属学会および主な活動
日本機械学会, 電気学会, 応用物理学会
- 勤務先
正員, 東京農工大学准教授 大学院工学部機械システム工学専攻 (〒184-8588 東京都小金井市中町 2-24-16 /
E-mail : k_iwami@cc.tuat.ac.jp)

今回のメカライフ特集号では、「承のものづくり」をお送りする。前回の特集号が「起のものづくり」であったことから、カンのいい読者諸兄はすでにお気づきであったかもしれないが、今回の特集号は前回から1年間続くシリーズ「起承転合のものづくり」の第2回に当たっている。物事の展開や文章の構成としてわれわれは「起承転結」という四字熟語を多用しているが、もともとこれは漢詩の構成を表す言葉で、中国語（漢文）では「起承転合」と表記する。その中で今回着目する「承」であるが、広辞苑に「起句の意を承けて敷衍する」とあるように、事物の発展の過程を表し、次の「転」につながる役割を果たす部分であるといえる。今回われわれメカライフ編修委員会では、これを「起源はわが国ではないものの、わが国において大きな発展・展開を示したもの」ととらえた「承のものづくり」を特集することにした。電子顕微鏡のミクロの世界から、造船・シールドマシンに代表される大型機械の世界まで、幅広い分野から16件の記事をお届けする。お忙しい中、興味深い記事をご執筆いただいた著者の皆様にこの場を借りて御礼申し上げたい。

「承のものづくり」の精神は、西洋文明を必死に受け入れ、消化してきた明治維新以来のわが国の歴史そのものである。それは単純なキャッチアップではなく、「和魂洋才」という言葉に代表されるように、西洋文明に自分たちのアイデンティティを加味したうえで内在化・発展させるものであった。そしてそれは戦後の復興期・高度成長期を通じてわが国の産業の大きな部分を支えてきたといえるだろう。このような姿勢は過去のある一時期「日本ただ乗り論」として海外から揶揄されたこともあったが、今回の特集をお読みいただければ、それが単なるものまねにとどまるものではなく、実用化・製品化に向けた数多くのイノベーションに裏打ちされたものであったことがおわかりいただけるだろう。

現代はグローバル化の時代と呼ばれる。筆者が身を置いている研究の世界でも、海外勢の論文を引用することは日常茶飯事である。同時に、自分の論文が誰かに引用されれば、それは自分にとって望外の喜びとなる。現代はこのような引用し引用され……のいわば「承のネットワーク」がかつてなく肥大化し、質・量ともに情報が洪水のように押し寄せてくる時代になっているともいえる。先人の成果を正しく承けたいと、いかに自分の独自性を出し、結果を世界に問うていくか？ここにこそ「承のものづくり」の精神を見出すことができるだろう。そしてそれは、研究の世界のみならず、これからも日本のものづくりに求められ続けるものであると筆者は確信している。継承のないところに独創は生まれない。メカライフ特集号の主要な読者層である機械系学生の方々にも、本特集にご執筆いただいた諸先輩方がいかにして「承のものづくり」を実現してきたか、その道のりに思いを馳せていただければ幸いである。